

飲んで読めば思い出す

浜屋 昭

今年もボジョレ・ヌーヴォを飲んでいる。「50年に一度」といわれた二年前と同等の出来栄え、という説明に矛盾はないらしい。

本国フランスを除けば、突出した忠実さで日本人は相変わらずこのワインを消費している。自身、求めて買うことはほとんどなくなったとはいえ、必ずパーティや振る舞い酒で口に入る。フランスやフランス語にかかわるようになって以来、全く口にしなかった年はないのだから、やはり特別な酒ではあるのだろう。

思えば、『フランス文学研究』の発行にかかわっていた頃、日本のバブル経済とともに、まさにこのボジョレは輸入ピークにあった。当時は10月末日あたりを研究誌の発行日としていたから、我々はヌーヴォで祝杯をあげただろうか。あのころは皆、12月の船便を待っていたような気もする。バブルに関係のない学生の身分で、フランスでは安酒のはずであるこれはいかにも高かった。そう、少しずつ、安価でうまいワインが手に入りだしたあの頃、日本で飲むこのボジョレ・ヌーヴォは相対的に高かった。空輸のコストは馬鹿にならなかったし、イベント後の不良在庫リスクもあり、今ほどの円高でもなかった。

きらきらとした色、渋みが少なく果実味が豊か、おそらくこれらがこの新酒の特徴であろうし、多くの「ワイン好き」が馬鹿にするのもこの点だろう。しかし、実はこの特徴こそが、ボルドーよりもブルゴーニュよりも、丁寧な果実の刈り入れを要求する。ヌーヴォの特別な醸造法は、葡萄の実をできるだけ傷つけないことを前提としている。フランスでは、もちろん多くの作り手が丁寧に葡萄を収穫するのだが、手摘みを義務付けられているのはシャンパーニュとボジョレだけである。ボトルの単価が高く、資本も多く投下されているシャンパーニュでならともかく、「お祭り用の安酒」と言ってもいいボジョレ・ヌーヴォで膨大な量のガメイを手摘みするのは大変なことだ。しかもこの葡萄の果皮は薄く破れやすい。

かつて、研究誌の編集はなかなか面倒で、写真製版へ回すまでの面倒な校正刷の確認があり、活字の切り貼りなどは手作業だった。不揃いなワープロ文字は、あのころの多くの研究誌の特徴で、手書きの原稿やタイプライター原稿を、それぞれのワープロで打ち直したりもしたものだ。おそらく今やその手作り感はないだろうが、原稿を集めるのも大変だろうし、家内工業的な努力は想像できる。

リヨンから車で回ったボジョレの葡萄畑の美しさは印象的な風景として記憶に残っている。広くなだらかにうねる丘、豊かな樹勢をもつガメイ。より北部、ブルゴーニュの凜とし整然たるたたずまいに対して、また南部、ローヌの急峻で石がちな様子に対して、いかにゆるやかで温かい土地であることか！葡萄畑のある **Douce France** を味わうには最適なところだ。

シャルル8世の姉であったアンヌの輿入れによってフランスに組み込まれて自治権を失い、フランス革命以来は、ボジョレはもはや特定の地域を表す言葉ではない。まさに、その土地から産出するワインの名前によって土地の一体感を維持していると言えるだろう。いまや人間の活動だけがボジョレの名前を支えている。

広島大学が広島街から移転し、経済バブルははじけ、人口が減少に転じ、地球は温暖化していると言われ、ユーロ圏が成立し、衰退した。手書きからワープロ、コンピュータと筆記ツールが変わり、モーパッサン短編の朗読カセットテープを大事に研究室からコピーした時代から、さまざまな音源フリーダウンロードの現在までは早かった。こうした目まぐるしい時代の中を、「一過性の流行り」に思えたボジョレ・ヌーヴォーが相変わらず日本で生き抜いているのを不思議な気持ちで眺める。11月15日に固定されていた売出日が第三木曜日になり、コンビニや大手スーパーが販売主体となったなど、細かな変化はあったものの、冬到来を告げる日本の風物詩のひとつとして確立したようでさえある。

ボジョレ生産者側、および、それを輸入販売する日本企業側の努力も忘れてはならない。徹底的なイメージ戦略、「解禁」という魔法のことば、目を引くラベルデザイン、最近で明らかに日本特別仕様の衣をまとうようになり、生産者組合が反対の意を伝えたにもかかわらず、ペットボトルも流通している。

ああ、またこれが届いたなあ、そういう季節なのだなあ、と思う。年に一度の季節感、すなわち旬を感じさせることは、長い年月の繰り返しを要するともいえる。

かつての自分の文章に目をとおしてみれば、なるほど安い酒の味がする。「手摘み」の酸のみが若々しいが渋みもなく、目新しさもない。熟成することもなく、まだここにあるのは恥ずかしい。

自分のものは不作の年としても、第一号から手元にあるこの『広島大学フランス文学研究』が毎年のボジョレのように、秋に手摘みで集められ、一年の成果を冬に運んできてくれるものであってほしい。これからもずっと。